

地域おこし協力隊の任務を終えて

2人の地域おこし協力隊員が、3年間の任務を終えました。

任務で得た経験やこれからの展望など、新たなステージに向けて進んでいく2人の思いを紹介します。



福岡奈織さん

2023年3月退任

互いを尊重する気持ちで
多文化共生の未来へ

幼い頃から海外に興味を持ち、約30の国と地域を訪れてきた福岡さん。多文化への知識と英語力を生かし、「多文化共生推進事業」に取り組んできました。

これは、全ての住民が互いに尊重され、対等の関係を保ち、共に暮らす地域の一員として町づくりに参画できるようにするためのミッション。国、地域、民族、人種、宗教、言葉、歴史観など文化的背景の違いによる壁をなくすことを目指す取り組みです。

「安芸高田市に暮らしている外国籍の方たちと話す中で、多くの課題に気付きました。例えば、子どもが小学校で巾着を持ってきてくださいと言われたときに、巾着のサイズのイメージが湧かなかつたり…。私たちが肌感覚で分かることが、文化が異なるために分からない、ささいな困り事がたくさんあるんです」。

安芸高田市で暮らす外国からの移住者や外国籍の人たちは約20か国900人以上。初めの2年間は多文化共生の担当課に所属しながらNPO法人安芸高田市国際交流協会の活動に参加し、災害時の情報発信や外国につながる子どもたちへの学習支援などを通して彼らへの支援を行うと同時に、学校や市民向けに講座を行い、多文化共生やSDGsなどについての考えを広めていきました。2年間で実施した講話やワークショップは、40か所・1,700人にもものぼります。

食べ物から社会を知る
世界へつながる学びを

3年目には、自宅で運営する自然栽培の「イニアビ農園」でオリジナル学習「世界とつながる農園プログラム」を発信。食べ物から世界の課題を知り、行動へのヒントを探ります。

参加者は学生や外国人が多く、一週間ほど滞在する人も。「昨年からは英語教室も開始し、生徒さんと外国の方の交流も生まれています。安芸高田市は自然や農業、多文化と学びの材料がたくさんある。安芸高田市に学びに訪れる人が増えるようにしていきたいです」。

土に触れ、文化を感じ、それぞれの気づきが世界へ。福岡さんはこれからも「共生」の未来を育てていきます。



イニアビ農園ホームページ

棚田の魅力にひきつけられ
地域密着で活動をスタート

「食と農のマッチング事業」のミッションで乾燥野菜作りに取り組んでいた1年目に、八千代町本郷集落の棚田に心奪われた花村さん。「棚田を訪れたとき、何だか…過去にもここにいたような気がするほど心が安らいだんです」。耕作放棄されている棚田が多いという現状を知り、まずは棚田を復活させようと開墾を始めました。

地域の人とのつながりができ始めた頃に出会ったのが、棚田の土地に「仙人の里」を作っていた植野

英明さん。「仙人の里」とは、お手製のブランコやシーソー、ターザンなどの遊具を備え、さらに約50本の桜を植えた、手作りの公園。多くの人が遊びに来てくれる場所にしたい植野さんの思いを聞いて、イベントを始めるようになりました。子ども向けにそうめん流しやピザ作り。大人向けには調味料作りなど、花村さんが得意な料理の腕を生かしました。

「イベントは月1回のペースですが、いつも30人ぐらいの親子が参加していただき、棚田ににぎわいのできたのがうれしかったです」と、充実した2年目を振り返ります。

小さな菓子工房をオープン
棚田でのお米作りにも挑戦

3年目は引き続きイベントを開催しつつ、新たな試みもスタート。地域おこし協力隊の退任後にお菓子

工房を作ろうと目標を立て、準備に取り掛かりました。まずは場所を探そうとしていると、「うちにある小屋を使ってもいいよ」と植野さん。DIYでリフォームまでしてくださったおかげで、花村さんは大好きな棚田で新しい一歩を踏み出せることになりました。

4月8日にオープンしたお店の名は「Reanka(レアンカ)菓子工房」。金土曜のみの営業で、グラノーラ、スコーン、植野さんが作ったハブ草を使ったゼリーなどビーガンスイーツ5、6種類と、手焙煎コーヒーをそろえます。さらに今年は棚田を1枚借りて、お米作りにも着手。「できるのかしら…」と不安をのぞかせますが、その瞳はワクワクした感情で満ちあふれていました。



イベント情報や参加申し込みは
InstagramのDMから

花村友紀さん

2023年3月退任

